

## 群馬県方言の社会言語学的研究 --30年間の若年層 における方言使用の動態--

著者	佐藤 ？司
号	23
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博 第388 号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/59322">http://hdl.handle.net/10097/59322</a>

# さ　　とう　　たか　　し 佐　　藤　　高　　司

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 388 号
学位授与年月日	平成23年 9 月 8 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 言語科学専攻
学 位 論 文 題 目	群馬県方言の社会言語学的研究 ——30年間の若年層における方言使用の動態——
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 小 林 隆 教 授 齋 藤 倫 明 教 授 千 種 眞 一 准教授 大 木 一 夫 准教授 甲 田 直 美

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、1980年から30年間に3回行った高校生とその保護者を対象にした経年アンケート調査から得たデータを用いて、現代の群馬県における若年層の方言動態を把握し、社会言語学的視点から群馬県方言の変容を明らかにしていくことを目的としている。

群馬県方言は、東京方言と同一の西関東方言に属し、共通語に近いという特徴を持つ。また、関東圏に代表されるような特徴的な方言形式も有する関東方言である。群馬県は北関東に位置し、鉄道や道路などの交通網では東京と直結していることから、群馬県方言は比較的早く東京からの影響を受ける方言でもある。このような背景を持つ群馬県方言の様々な変容の中には、共通語化はもちろんのこと、新方言の発生などの共通語化とは異なる言語変化が観察される。本研究では、急速に進む現代日本語方言の変容を具体的に明らかにするとともに、現代日本語方言の変容に関する新たな視点も検討する。

社会言語学的研究とは、言語の使用面に着目し、多人数調査とそれに伴う大量のデータを扱う手法による研究を指す。具体的には、群馬県において、多人数の高校生を対象に、30年間で3回のアンケート調査を実施することで大量のデータを集め、その結果の推移から主に若年層における言語使用の動態を観察しようとする。そして、言語使用の変化の要因を言語内外から考察し、現代日本語方言の変容を現代群馬県方言から明らかにしようとするものである。

本研究は、新方言研究における極めて初期にあたる研究を出発点にしており、長期間にわたり経年調査を重ねていることから、新方言研究としてはもちろんのこと、日本語方言の社会言語学的研究として

も貴重な研究である。また、群馬県の方言研究にとっても、新方言研究を基盤としながら若年層の方言の変容に視点を当てた研究として、他に類を見ない研究である。以下では、本研究の構成及び各部各章の概要を述べる。

## 第1部 理論編

### 第1章 本研究の目的と方法

### 第2章 新方言の理論と本研究

### 第3章 群馬県方言及び新方言の研究史

### 第4章 本研究における経年調査の概要

第1部は理論編である。本研究の目的と方法について述べ、新方言の理論とこれまでの新方言研究を整理しつつ、本研究の立場を明らかにした。また、3回の経年調査の概要を述べた。

第1章では本研究の目的と方法を述べた。本研究においては、1980年から2011年までの30年間に3回行った群馬県の高校生とその保護者を対象にした経年アンケート調査から得たデータを用いて、現代の群馬県における若年層の方言動態を把握し、社会言語学的視点から群馬県方言の変容を明らかにしていくことという目的を設定した。

第2章では、新方言の理論と本研究の関係について述べた。新方言とは「共通語化とは異なる（対立する）低文体での言語変化」ととらえ、特に本研究と関係の深い「新しさ」、「地域性」、「文体差（場面差）」、「学校教育」と新方言についての関係から、本研究の理論的立場を明確に示した。本研究では、新方言を対象とした言語研究を基盤としながらも、若年層における様々な言語変化を扱い、そのメカニズムを明らかにしようとする。そこでは、新方言研究において対象とされない表現も研究の対象とし、若年層における言語変化を多様な角度から把握しようとする。

第3章では、本研究の対象地域である群馬県の方言研究史と本研究の基盤である新方言の研究史について詳述した。群馬県の方言研究は、第2次世界大戦後、上野勇から脈々と研究が受け継がれてきた。そして、20世紀後半から21世紀にかけて、日本における方言に対する考え方は「矯正されるべきもの」「蔑視されるもの」から「保護されるべきもの」へと変遷してきているが、群馬県方言に関する出版物や研究にもその流れを見ることができた。社会言語学的な研究スタイルも、1980年以降、群馬県方言研究の世界に根付き、新たな展開を迎えようとしている。一方、群馬県の新方言研究は、日本における新方言研究とはほぼ足並みを揃えるように歩んできた。群馬県の新方言研究に端を発した本研究は、30年間に3回の調査及び研究報告を重ね、日本の方言研究における社会言語学的研究の進展と相まって、若年層における言語変化研究へと新たな展開を迎えている。本研究が示す経年調査とそれによる若年層の言語変化に関する研究は、社会言語学的研究において重要な一研究手法であると同時に社会言語学的研究に新たな視点を示す研究である。本研究をもって、これからの日本の新方言研究をリードし、社会言語学的研究への新たな提言としたい。

第4章では、1980年から30年間で3回行った調査の概要を述べた。調査地域は、先行研究による方言区画に行政区画を加味して区分した5地域であり、利根沼田、吾妻、西毛、中毛、東毛と呼ぶ。調査方法は、3回ともアンケート用紙に記入する方式である。第1回調査は1980年に、第2回調査は1992年に、第3回調査は2010年に実施した。本研究においては、経年調査を用いることにより、群馬県における若年層の言語使用の変容に限定して、30年間という実時間のタイムスパンで、現在、18年前、30年前という間隔で、言語使用の様相の変化を観察することが可能になる。また、変化の要因やメカニズムへのア

プローチも容易となった。

## 第2部 群馬県における30年間の新方言の動態

### 第1章 東京型新方言と地方型新方言の30年間の動態

### 第2章 東京型新方言と地方型新方言の接触

### 第3章 東京型新方言の普及

第2部は、群馬県における30年間の新方言の動態とし、新方言という言語変化の要因として、東京という大都市の影響に焦点を当てた。東京という大都市が若い世代の言語変化にどのような影響を与えるのか、群馬県における新方言の使用に関して東京での使用の有無を指標とし、その相違を見ることで解明を試みた。

第1章では、群馬県における新方言について、第1回調査（1980年）以降、第2回調査（1992年）までの間に東京でも新方言の傾向を示す新方言（東京型）と、群馬県だけの新方言（地方型）とに分け、群馬県若年層での30年間のそれぞれの動態を見た。東京型の新方言の多くは、群馬県の広範囲の若年層に使用され続け、ある程度以上に広まること、その広まり方のはじめは急速であることなどが分かった。また、地方型の新方言については、伝播はさわめて緩やかで群馬県全域に及ぶことはあまりなく、衰退していくものも多いことがわかった。新方言に東京での使用という要因が加わることにより、その後の広まりの範囲や速さに何らかの影響があることが明らかになったのである。新方言には、使用を伸ばし続けるもの、使用率を伸ばし続けなくても使用され続けるもの、衰退したりあるいは衰退傾向を示したりするものもあるなど、改めて現代の言語変化の多様さを確認した。

第2章では、東京型と地方型の新方言が群馬県内で接触した「～のように」の3形式について、それぞれの動態とその関係を考察した。「～のように」の3形式とは、東京型の新方言がミタク、地方型の新方言がミチョーニ、ミトーニである。東京型の新方言ミタクは、東京から侵入し、第1回調査（1980年）では、低文体が存在せず伝播元の東京にも近い東毛ですでに盛んに使用されていた。その後、東毛を発信元に12年間で群馬県全域に急速に広まり、地方型の新方言ミチョーニやミトーニと交代していった。さらに、第3回調査（2010年）までの18年間で緩やかに進んでいることを確認した。この事例から、東京型の新方言と地方型の新方言は、一時的に共存するものの、次第に東京型の新方言が各地域で勢力を拡大し地方の広範囲で使用されるようになると交代が起り、地方型の新方言はその勢力を衰えさせていくことを指摘した。そして、東京型の新方言が地方における文体的空白を埋める表現であった場合、急速に普及すること、地方への東京型の新方言の普及については「普及のSカーブ」の適応の可能性を示した。

第3章では、チガカッタやチガクナッタの動態から、東京型の新方言が群馬県にどのように普及するのかを考察をした。東京型の新方言チガカッタ、チガクナッタは、第1回調査（1980年）には、チガカッタはそれほどではないもののチガクナッタが東毛や北毛で使用の兆しが見え始めた。第2回調査（1992年）になると、両表現ともに群馬県全域の各地域ではほぼ同程度の使用率を示し、両表現の使用傾向が極めて似通っていることを示した。第2回調査（1992年）の頃から、チガクナッタ、チガクナイ、チゲー、チガクテ、チガケレバ等、「違う」という動詞をまるで「チガイ」という形容詞のように活用させて使用する事例が群馬県内で数多く見受けられるようになった。チガクナッタによって始まった動詞「違う」の新しい形容詞への変化は、完結へと向かったと見ることができ、品詞・活用体系を整えようとする言語変化と捉えることができた。また、女子若年層の使用の程度が東京型の新方言の地方への普及を観る

際の一つの指標となり得ることが考えられた。

以上、第2部全体として、30年間の群馬県における新方言の動態には、東京での使用が群馬県内での普及速度や普及範囲の違いに影響を及ぼすこと、文体的な空白の有無により普及の程度や仕方に差が生じること、東京型新方言に「普及のSカーブ」の適用の可能性があること、新しい品詞の誕生や活用体系の整備など現代日本語方言においても起こっていることなど、注目すべき点が多くあった。大都市・東京を擁する首都圏に隣接する群馬県において、東京の影響を時には大きく受けつつ、時には独自に、共通語化という全国各地に一樣に広がる変化とは異なる多種多様で複雑な言語変化が起きているのである。

### 第3部 群馬県における30年間のベーの動態

#### 第1章 意志・勧誘のベーの動態

#### 第2章 推量のベーの動態

#### 第3章 ベーの新しい変化

第3部では、群馬県における30年間のベーの動態として、若年層における群馬県方言ベーの使用を観察し考察を加えた。群馬県方言のベーは、東日本の「ベイことばの坩堝」と表現されるほど形式が豊富であり、群馬県におけるベーの観察は、東日本におけるベーの変容に関する研究に大いに貢献するものと期待される。

第1章では意志・勧誘のベーについて、観察し考察を行った。『方言文法全国地図』によれば、意志・勧誘のベーは、東日本に分布し、その西端は群馬県と長野県の県境、山梨県東端、伊豆半島（伊豆諸島を含む）である。東日本でも秋田県や新潟県、日本海側には意志のベーの分布は認められない。また、福島県から宮城県の太平洋側を中心にべが分布している。群馬県においては、1980年から1992年にかけて、男子若年層では新方言ンベーが発生し広まる傾向が見られた。新方言ンベーは、群馬県方言の音声的特徴を背景にル語尾動詞のルの撥音化を介して生じたと考えられる。また、ベー形式でもンベー形式でも接続の単純化が進んでいた。1992年から2010年まででは、ベーとその新方言ンベーだけでなく、ツペやビャーなど（ベーのバリエーション）を含めた全体が衰退傾向にあった。しかし、ベー形式では依然として接続の単純化が進んでいた。意志・勧誘のベーは、新方言ンベーを発生させ広めたり、接続の単純化を起こしたりしながら、地域に密着して根強く使われ続けているのである。

第2章では推量のベーについて、観察し考察を行った。東日本の動詞に関して、『方言文法全国地図』により、推量のベーを意志形の分布と比較してみると、両者を区別なくベーで表す地点が東北全般に多い一方、意志をベー、推量をダンベー・ダッペーとダの挿入で区別する関東地方、意志をべ、推量をベーと長さで区別する福島浜通り、そして、意志には別語形を用い推量のみでべ（＋終助詞）を使う青森・秋田など、いろいろな組み合わせが認められる。意志・勧誘も推量もベーで行われていた群馬県を含む関東では、共通語の使い分けの影響により、推量ではダンベーを使うようになった。1980年代あたりから、群馬県の若い世代では、意志・勧誘のベーにンベーが発生し、その影響は推量のダンベーにも及び、1992年ごろには推量でもンベーの使用率は上昇した。一方、1992年から2010年にかけて、若年層では、意志・勧誘でベー、推量でダンベーという方言的表現は衰退傾向を見せ、また、ベー全体に衰退傾向も強まっている。それに同調する形で、新方言ンベーも減少傾向に転じている。しかし、ベー全体の衰退傾向という大きな流れの中であって、東日本で進行中である、推量をダンベーからベーにという大きな変化（単純化）だけは現在も進行中であり、クルベー、オモシレーベーともに、1980年から30年間で使用が伸びているのである。

第3章ではベー全体での新しい動きについて述べた。1992年から現在までの18年間の新たな動きとして、女子若年層がベーを男子若年層と同程度あるいはより多く使用する傾向を見ることができた。この傾向は、方言の使用を「スタイル」としてではなく「要素」としての使用としてとらえる方言の「アクセサリー化」と考えられる。既成の考え方では古くて土着的で男性的なイメージのベーも、若年層女子においては、自分の言葉を新しく斬新に飾ってくれるアクセサリーとなり得ると考えられるのである。加えて、群馬県的女子若年層が地元方言であるベーをバリエーションを広げたり楽しんだりするためのツールとして使用し始めた現象と考えれば、女子若年層によるベーの「おもちゃ化」ととらえることもできる。また、意志・勧誘と推量のベーの使用において、共通に女子が男子をリードする傾向を見せる地域は、吾妻、西毛、中毛であった。県庁所在地の前橋市を擁する中毛と群馬県の交通の中心地・高崎市を擁する西毛でのこの動きは、おそらく群馬県周辺部に広まると予想され、隣接する吾妻が「見ベー」を除き中毛、西毛と同じ傾向にあるということは、まさにこの動きの広がりと捉えることができよう。

第3部では、群馬県方言におけるベーの動態をつかむことができた。ベーは衰退傾向を示しつつも、共通語化にあらがひ群馬県方言の中に根強く生き続けている。それには、新方言ンベーの発生や接続の単純化、あるいは推量のダンベーからベーへ交代と接続の単純化、さらには「アクセサリー化」や「おもちゃ化」など、形式面・文体面で様々な変化を活発に起こしてきたことが大きいと考えられる。

#### 第4部 群馬県若年層における方言使用と属性

##### 第1章 方言使用における男女差

##### 第2章 方言使用意識の変容

##### 第3章 ラ抜きことばの変容 世代差・場面差・男女差・地域差・語彙差

##### 第4章 若年層の方言使用と「学校方言」

第4部では、群馬県の若年層における方言使用と属性の関係を考察した。新方言研究をはじめとする方言の社会言語学的研究では、年齢や場面などの属性を変数として方言の状態を変化していくものとして捉えるが、本研究も同様である。また、方言と共通語の使い分けやその言語使用意識、志向についても属性として扱う。

第1章では新方言の東京型と地方型それぞれで、使用における男女差をみた。東京型の新方言については、第2回調査（1992年）の時点で男子より女子に使用される傾向が強いことを確認していたが、第3回（2010年）でも同様の傾向を確認することができた。現代社会にあって最近の30年間の傾向として、東京に近く首都圏に隣接する群馬県という地方において、東京のことばの影響が若年層においては女子の方により強く現れることの検証がなされたと言えよう。一方、地方型の新方言では、男性若年層の使用が女子より高い傾向にあった第2回調査（1992年）とは異なり、第3回調査（2010年）においては、男子に比べ女子の方がより強く地方型新方言を支持している状況が浮かび上がってきた。つまり、2010年の現代においては、東京型も地方型も新方言の使用に関して女子の使用が男子を上回るという傾向にあるということである。この傾向は現代日本語における方言使用態度の変容と密接に関係するものであり、2005年前後に起こった若年層女子の方言ブームに象徴される方言の「アクセサリー化」、「おもちゃ化」が群馬県の若年層にも起こっているためと考えられるのである。

第2章では、群馬県の若年層における方言・共通語の志向と言語使用意識の変容について、社会や日本語の変容、言語環境の違いなどと関係付けながら考察した。群馬県全域における大きな言語使用意識の変容として、まず、山間部の男性若年層での方言志向の弱まり、共通語志向の高まりをあげることが

できる。これについては、上越新幹線や関越自動車道が1990年前後に相次いで開業、開通したことの影響が大きいことを指摘した。次に、女子若年層における方言志向の高まりの傾向を確認した。その傾向は、東毛や中毛といった平野部に比べ、利根沼田、吾妻、西毛といった山間部の若年層女子にその傾向が強く出た。この言語使用意識の変容は、2005年前後に起こった女子高校生を中心とする方言ブームの影響は少なからず受けてのことと考えた上で、生育地方言や地元の方言を耳にする機会の多さとの関係によるものと推察した。最後に、群馬県全域において方言と共通語の弁別意識の希薄さが進行していることを確認し、群馬県方言の共通語化の進行によるものと考えた。若年層の言語使用意識には、交通環境の整備等による東京と地方の関係といった社会の変容、生育地方言や地元方言との接触の程度からくる言語環境の違い、共通語化の進行や方言の「アクセサリ化」などの日本語全体の変容など、様々な要因が絡み合っているのである。

第3章では、若年層におけるラ抜きことばと世代差、場面差、男女差、地域差、語彙差との関係を見た。世代差については、若い世代で使用が増えていることを確認し、現在も増え続けていることが確認できた。場面差については、改まった相手になればなるほどラ抜きことばの使用を抑え、同世代では親疎に関係なくラ抜きことばを使用する傾向が18年間継続していることを確認した。男女差については、1992年からの18年間で、女子若年層のラ抜きことばの使用が伸び、高い使用率を示していた。これは、特に女子若年層において、ラ抜きことばに対する規範意識の薄れが生じたことを示すものではないかと考えた。地域差については、群馬県において特別な地域差をもたず全域にラ抜きことばの使用が広がっていることを確認した。語彙差については、着レル（と「着る」）と逃ゲレル（と「逃げる」）の使用頻度の差異から、その語彙の使用頻度の差異により、普及の仕方に違いが生じ、そのために普及パターンにも差異が生じるものと考えた。この章の観察と考察は、共通語圏におけるラ抜きことばの最新の実態報告であると同時に、ラ抜きことばに関して、特に、男女差、語彙差で注目し値する結果と言えよう。

第4章では、若年層の生活に関係の深い学校社会と方言の関係について「学校方言」という用語を規定して考察した。学校方言という用語は、すでに存在するものの明らかな定義のないままに使用されていたため、学校生活と関係の深いことばの中でも限られた地域の学校社会で通用する表現を「学校方言」と定義付けた。この定義から、学校方言は「気づかない方言」「気づかれにくい方言」に近く、その関係から、都道府県単位であること、改まった場面でも使用される傾向にあることを指摘した。また、群馬県における「学校方言」の使用状況の推移をみる中で次の（１）～（３）の三点も確認した。（１）「学校方言」は、一旦その地域の学校社会に広まってしまえば、地域の学校社会という改まった場で使用されるため、これにとって代わる何らかの力をもった新しい表現が広まってこない限り、使い続けられること。（２）「学校方言」は、地域社会において場面差はなく使用されるが、「非地元」の場合、やや使用を控える配慮が加わり、その配慮とは、もしかすると方言かもしれないとか乱暴な言い方かもしれないといった不安や疑義であること。（３）「学校方言」が広まったり使用され続けたりするためには、その事物や行為が存在しなければならず、それらが存在しない限り東京や首都圏の言語的な影響も及ばないこと。この章では、「学校方言」という今まで漠然と理解されてきた用語の性格づけを中心に論じ、「学校方言」の明確化を図った。この章の存在価値は、「学校方言」という言語研究の新しい分野の開拓であり、先駆けであろうとすることである。今後は、「学校方言」それ自体に焦点をあてて、調査や考察を進めることを改めて主張するものである。

## まとめと今後の展開

### 新方言研究と国語教育——「広義の新方言」という考え方——

以上の本研究の構成から明らかなように、本研究は新方言研究を基盤とした若年層の言語変化についての論考である。群馬県という首都圏に隣接する共通語圏において、若年層では共通語化の波に襲われながらも、言葉が生まれ、あるいは変化し、時には消滅していた。その中にあって、方言が生まれ広まるものがあった。それが新方言であった。新方言は、群馬県方言という共通語にきわめて近い環境の中にあっても活発に展開し、群馬県方言に活力を与えていたのである。

本研究では、新方言を中心に若年層の言語使用の変容を見る中で、群馬県方言の動態のメカニズムに迫ることができた。それは、東京と地域社会との関係が言語使用に大きな影響を与えていること、伝統方言が変容しながら根強く生き続けていること、男女差や使用意識や生活環境などの様々な属性が複雑に絡み合っ若者の方言使用に影響を与えていることなどである。この群馬県方言における動態のメカニズムは、現代日本語方言の動態のそれにも通じるものである。

さて、21世紀となった現在、新方言には新たな展開の可能性はある。それは、国語教育、言語の教育上での展開である。新方言をことばの教育に応用しようという考え方である。この最終章では、言語学上の新方言を基盤に「広義の新方言」という考え方を提案し、国語教育や言語の教育上での新展開について述べた。ここでの試みは、新方言に対する新たな言語学上の用語を作り上げることではなく、言語学ではない教育の世界で新方言の活力を応用しようとするものである。

「広義の新方言」とは「新しい方言（地域性のあることば）、若い人だけが使う方言（地域性のあることば）、新しく生まれた方言（地域性のあることば）」である。それを規定する条件は、「新しいこと」「国語辞書に載っていないこと」「地域性があること」である。「広義の新方言」は、国語教育や言語の教育において日常のことばや方言、言語学に興味を持たせるための用語である。日常の言語に起こっている現象に気づき、その現象を理解しやすく、わかりやすく説明するためのものである。そして、やがて開かれる言語研究の扉の向こう側にある、新方言や言語変化という、より深い研究への「誘い水」なのである。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、群馬県方言をフィールドとし、30年間にわたる経年調査を行うことで、若年層における新方言を中心とした方言使用の動態を明らかにしようと試みたものである。全体は「まとめと今後の展開」を加えて5部からなり、15の章から構成される。

まず、第1部は「理論編」であり、本研究の立場について論述する。第1章では本研究の目的と方法について述べる。第2章では本研究の基盤となる新方言研究の理論について検討し、第3章では群馬県方言と新方言の研究史を概観する。第4章では本研究で行った経年調査の概要を述べる。

次に、第2部「群馬県における30年間の新方言の動態」は、第1章で、新方言を東京型新方言と地方型新方言とに分け、30年間のそれぞれの動態を見る。第2章では、東京型と地方型の新方言が群馬県内で接触した事例として「～のように」にあたる形式を取り上げる。第3章では、「チガ Катタ」や「チガクナッタ」の動態から、東京型新方言が群馬県にどのように普及するかを考察する。第2部全体として、首都圏に隣接する群馬県においては、東京の影響を大きく受けつつも地方独自の変化も認められ、多種多様で複雑な言語変化が起きていることが明らかになった。



続いて、第3部「群馬県における30年間のペーの動態」は、第1章で意志・勧誘の「ペー」について、第2章で「推量」の「ペー」について取り上げ、第3章ではそれらの「ペー」の新しい変化について論じる。第3部全体として、「ペー」は衰退傾向を示しつつも根強く生き続けていること、それには、新方言「ンペー」の発生や接続の単純化、あるいは「アクセサリー化」「おもちゃ化」などの形式面・文体面における活発な変化が大きく影響していることが明らかになった。

さらに、第4部「群馬県若年層における方言使用と属性」は、第1章で東京型と地方型の新方言の男女差を見る。第2章では使用意識の問題を取り上げ、第3章ではウ抜きことばについて分析する。第4章では学校社会と方言の関係について考察する。第4部全体として、東京に近く首都圏に近い群馬県においては、東京のことばの影響が若年層女子により強く現れることが明らかになった。

最後に、第5部にあたる「まとめと今後の展開」では論の全体を総括するとともに、今後の課題として国語教育の立場から「広義の新方言」という考え方を提案する。

従来、新方言の研究は現在における年齢差をもとに行われることが多かったが、本論文は3回にわたる経験調査から実際の言語変化を把握しているところが評価される。また、首都圏に隣接する群馬県という独特なフィールドにおいて、若者が東京型の新方言と地方型の新方言にどう対応しているかを明らかにした点も興味深い。これらの成果は、新方言研究、群馬県方言研究に大きく寄与するものであり、高く評価できる。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。